長篇恋愛小説

ファッション・モデル

丹羽文雄著

文華新書

「文華新書」刊行のことば

新しい宇宙時代に生きる現代人は、今日に強く、さらに明日に逞しく生きるために、どん欲なまでに文化教養の指針を求めています。

この新書は、激動と混乱の世代に知識を整理し、新しい法則を追求し、美と愛、生と死、結婚と性などについて、尊い価値を創造し、生活を豊かにすることを願い刊行するものであります。そして、今日と明日への教養・実益を探求するものと、興趣のつきない読物とを、シリーズとして、文化の華を開かせたいと念願します。

なお「文華新書」の内容、造本など既刊のもの及び今後の刊行について、ご意見などお寄せ下されば幸甚です。

ファッション・モデル

昭和40年4月10日　第1刷発行　　¥ 270

著者との諒解により検印廃止

© 著者　丹羽文雄
発行者　大島敬司
印刷所　杜陵印刷株式会社

発行所　東京都千代田区丸の内丸ビル783区　株式会社　日本文華社

TEL　東京・(201) 2752 4750 (211) 5063 振替 東京 43444番

○万一落丁，乱丁の場合は，返送次第本社でお取り替え致します。
○小社発行品切れの図書雑誌は近くの書店又は本社へご注文下さい。

ファッション・モデル

丹羽文雄著

文華新書・小説選集

目次

この苦労を誰が知る……六
さらに稽古を……一八
モデル修業第一課……二三
東京駅にて……三一
プリズンの父……三七
病気見舞……四五
出会い……五三
大河内という存在……五六
知られざる真相……六七
旅先にて……八二
ファッション芸者……八五
蒲郡ホテルにて……九七
四七一一芸術学院……一一三
ファッション・マネキン……一二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

松山事件……一二七
別居……一二四
温泉場へ……一三七
娼婦誕生……一四一
白い木蓮……一五六
生存競争……一六四
檻を出た獣……一七一
男のような行動（一）……一八六
男のような行動（二）……一九一
男性化……二〇二
MとW（一）……二一七
MとW（二）……二二二
MとW（三）……二三〇

カバー装画　宮本三郎

ファッション・モデル

この苦労を誰が知る

五月の陽差が、たれにも気付かれずに、五階建の細長い窓に落ちている。午後一時すぎ。街の騒音も、五階の窓までは届かない。

二千人をゆうに収容のできる大講堂は、椅子をとり払われて、ダンスホールを連想させた。舞台には、小さい黒板が持ちだされていて、アブストラクトの下絵のような線が描かれている。黒板を二つに仕切って、スプーンのような線が描かれていた。

それと同じ線が、大講堂の床いっぱいに描かれている。大きなスプーンの輪郭である。柄のところが三四間はあるスプーンの線である。その柄のところを、ハイヒールの女がしなをつくりながら歩きはじめる。とたんに、マイクを通じて女の声が聞える。

「第六景、名曲のいざない……妙なる調べの女神、ミューズが手に抱くハープの絃を爪弾く時、森の小鳥も囀りを止め、野に咲く花も耳を傾けるとか……」

美文調の朗読がはじまった。

途中からこの講堂にはいって来た九鬼義方は、隅の椅子にかけていたが、思わずあたりを見まわした。ファッション・ショウの舞台稽古を見物するのは、これがはじめてであった。大講堂が臨時の舞台稽古場になっている。本物のファッション・ショウは、二三回見ているが、芝居とはちがい、たかが舞台に出て、歩くだけが仕事のかの女らに、舞台稽古など必要でないと考えていた。セリフのやりとりをするわけでもなく、一人一人が舞台を歩いて、何かしらの身振りを示すだけのことである。舞台度胸のある女なら、すぐその場で舞台に出ても、結構つとまるのではないかと単純に想像していた。

マイクの声はつづいている。

「この美しいメロディが、あなたの心を優しくとおり抜ける時、あなたの夢を楽しませ、この上もなく美しいものとすることでしょう。ここに繰りひろげられるコスチュームの数々は、みなさまよく御存知の、西海

赤児先生、木山みつ先生、河田青風先生、浴上おち子先生、九鬼義方先生、それに東崎みどり先生の皆さまが、美しいメロディーに誘われて、デザインされた作品でございます」

自分の名前を呼ばれて、九鬼は気まり悪くなった。自分がドレスのデザインをやったのは、これが初めてである。マイクの声のように、ことさら美しいメロディーに誘われてつくり出したものではない。そういわれると穴にはいりたいように恥しくなる。

九鬼はマイクに向って喋りつづける女性を眺めやった。三十前後の地味な印象であるが、朗読の調子は素人ばなれがしている。右手の窓のそばの立机によりそい、「一九五四年、初夏のモード」の台本をよんでいる。

「あのアナウンサーは、声優ですか」

九鬼は、そばに今回のショウの主催者側の若い係りに訊いた。一九五四年初夏モードは、F・K婦人雑誌とK紡績株式会社の共同主催である。ショウの会場は、某デパートの小劇場が予定されていた。

「新劇の女優さんです。ファッション・クラブに所属した方で、いつもあのひとが司会をつとめます」

本物の舞台では、舞台の裾でアナウンサーが司会をつとめるが、たれにも司会がつとまるというのではなかった。司会するにも、舞台稽古が必要であった。

朗読でないアナウンサーの声があった。

「上衣を脱ぐ時に、ここのところを喋るんですね。その間がありますか」

それに対して、演出家が答えた。九鬼は、なるほどと合点をする。スプーン形の白墨の線の中を、ファッション・モデルが自分勝手に歩いているわけではなかった。

「このあたりで、こう右手をあげて、ぐるりと一廻転して、左手にかえて、ここまで歩いて下さい」

演出家がことばやさしく、モデルに振りつけをしている。アナウンサーは、モデルの行動に従って、もっとも効果のある瞬間をとらえて喋る。舞台の会話のように、緊密に呼吸を合わせる必要があった。

「ぼくは初めてファッション・ショウの舞台稽古を見るんですが、大変なことですね。まるで撮影所のように、むつかしいものだ。めいめい台本を持ってい

る……」

大講堂には、ショウに必要な道具がもち出されて、二十人近い人々がまわりを取りかこんでいる。ピアノがあり、アナウンサーの席があり、進行係があり、一方の壁際には、出番を待つファッション・モデルが五六人、椅子にかけている。モデルはめいめい胸に、番号を書いた紙を貼りつけている。台本を見ると、モデルは十二名、他に特別出演が二人いる。演出家が、白墨で描いた舞台の上で、モデルの位置をきめたり、出入りの番をきめたり、芝居の舞台稽古そのままの演出ぶりである。

「一九五四年、初夏のモード」のファッション・ショウ、八景は、一時間半で終る予定であった。が、朝のうちから舞台稽古をはじめているのだが、ようやく六景まで来たところである。稽古は五時間はかかるようである。

台本の文句で気に入らないところがあれば、直ちにその場で訂正される。

演出家は、モデルに振りつけをしているだけでなく、照明係にも、いちいち指示をあたえる。九鬼は係りからもらった台本を、ひらいてみる。表紙の裏のところに、スタッフとして、構成、演出、装置、照明、振付、音楽、編曲、司会と各分野が明記されているのをみて、ファッション・ショウなるものが決して生やさしいものでないことがわかった。堂々たる芝居を演ずるほどの楽屋裏の努力である。九鬼は自分の世間知らずを苦笑した。

演出家は、忙しい。

「あなた方二人は、そのまま上手にはいって……あなたは、ここの椅子に、こうして腰をおろして……」

いちいち自分で演出家は恰好をつけてみせる。サンマー・ドレスを着たモデルは、寒そうな感じであった。かの女は、半分のストッキングをはいている。演出家は、モデルに、ストールのはずし方を教える。

「もっと情緒を出して……こう手をのばして……」

しかし、そのモデルは若くて、慣れていないとみえ、のばした右手が十分にのびきらなかった。ピアノはたえず鳴っている。アナウンサーは、美文調の朗読をつづける。ボタンがうまくはずれないモデルは、すこし逆上気味である。本物の舞台でとちっては、大変

である。九鬼が見ているところでは、どの稽古も、すらすらとはいかなかった、

あるモデルは、

「上衣を右手でとるのです。それを舞台の陰の人に渡して、すぐその手でラケットを持つようにして下さい」

その仕種を、自分で何度もやっている。

稽古の出を待っているモデルは、窓際の椅子で自分らの会話をやっている。たばこをくわえているのもあった。モデルの中には、人妻もあり、娘もまじっている。

「今度のショウは、全部スプーン・ステージなんですね」

と、九鬼が係員をふりかえる。

ステージには、三種類があった。普通の舞台でやるステージ・ショウと、客と同じ位置で見せるフロアー・ショウがあり、今度のように舞台から大きなスプーンをつき出したようなステージでやるスプーン・ステージである。スプーン・ステージとなると、前からもうしろからも、下からも眺められることになる。普通のステージの場合なら、モデルはうしろを向いた時には、ほっとすることも出来るのだが、眺められっ放しは辛いことである。

大講堂の講師の控室が、モデルの更衣室にあてがわれていた。モデルたちは、出たり入ったりしている。濃紺のイヴニングをきたモデルが、更衣室の入口に姿をあらわした時、九鬼ははっと軽く息をのんだ。そのモデルはイヴニングの胸に、6という数字を貼りつけている。イヴニング・ドレスのせいか、かの女の歩き方は舞台稽古の調子ではなく、いかにも、どこかの夜会にあらわれた人のように落着いてみえた。

やがて、イヴニングのモデルが、中央の、白墨で描いたスプーン・ステージの柄のところに立った。ピアノは、ルンバ、ラプソディーに変った。イヴニングの女が、歩きはじめる。アナウンサーの声が追いかけるようにひびいた。

「ルンバ、ルンバ、女の情熱と命をこめたルンバ。悲しいまでに激しく心をかきたてるルンバ……これは、洋画家、九鬼義方先生が、『ルンバ・ラプソディー』の調べに想いを馳せてデザインされたイヴニング・ド

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

レスでございます。みなさまもお聞きのこのルンバ・ラプソディーは女の切なさ、淋しさが胸に重くおおいかぶさってくるような気がいたしませんか。このような幻想を、木綿の張りと濃紺で重さを出し、アクセサリーや髪かたちに、女らしさを持たせてみました。製作者、土方教子先生、モデルは京極映子さん」

モデルの京極映子は、本物のスプーン・ステージのように、場内いっぱいの眸を意識しているらしかった。かの女の場合は、演出家もこまかい駄目は出さず、ずっと見守っている。場慣れしているというのか、気に入ったドレスのために、自分のもののような満足感が自ずと姿にあらわれているせいか。いかにも自信のある歩き方である。一廻転するのも、手のあげ下しにも、すこしの不自然さがない。九鬼は自分の作品を眺めているというよりも、京極映子を眺めている。かの女と九鬼の眸が合った。かの女は、わずかに目で挨拶をおくった。

京極映子の場合は、ただ一回の稽古ですんだ。舞台稽古に慣れているせいもあるだろう。かの女が、九鬼のそばにやって来た。

「先生、ありがとう、見に来て下さいましたのね」

身長一六四センチ、胸廻八六センチ、ウェスト廻五六センチ、腰廻九二センチ、肩幅三九センチ、頭廻二二インチ半の京極映子を、九鬼は見あげるようにした。二十一歳の若さが、匂うように迫る。

「映子さんは単に歩いているんじゃなくて、ちゃんとルンバのリズムに乗って歩いているんですね」

そんなことはあたりまえだと言わぬばかりに、かの女は苦笑する。

「あなたがそのドレスを着ると、ぼくがデザインをしたものではないような気がする。別の生命がふきこまれたみたいで……」

眸をかがやかせて、九鬼は改めてかの女のドレスを眺めやる。目鼻立ちが大きくて、九鬼は神経質らしい青い顔をしている。

「私自身、このイヴニング、とても気に入りましたわ。気に入らないドレスの場合は、早く済んでしまえと思うだけですけれど、気に入ったのになると、いつまでも着ていたくて……」

「京極映子さんに着てもらったから、よかったんです

「このイヴニング，とても気に入りましたわ」

よ」

「先生には、すばらしい感覚がおありですわ。やっぱりフランス人の方を奥さんにしていらっしただけあって、他のデザイナーの先生とは、ちがった、するどい感覚をお待ちですのね」

ちょっと九鬼のかおが曇ったが、自分でも気のつかないくらいであった。

「先生」

と声をかけて、製作者土方教子が助手らしい若い娘をつれて来た。四十を過ぎている土方教子は、グレーの濃い服をきている。

「先生のアイデアを、うまく消化していますでしょうか。心配ですわ。いまの内なら、いくらも直せますから、どしどし小言を仰言って下さい」

土方教子は、九鬼の描いたデザインを鞄からとり出した。九鬼は単に自分の考えたイヴニング・ドレスを一枚の紙に描いたにすぎない。それを実際に裁断し、縫上げるまでの苦労は、かれは知らないのだ。九鬼の描いた線が、二三枚に写されていて、京極映子らしい裸の線がそのドレスの中に描きこまれていた。京極映

子のからだに合うように仮縫がされるためである。規格品を作るのではなく、モデルの肉体をのみこんでから、九鬼のデザインを生かそうとするのだから、製作者の苦心もなみ大抵でない。一流の製作者となれば、女体のスケッチも画家のようにやってのけなければつとまらない。

「映子さん、もう一度歩いてみて下さい」と、九鬼が言った。「うしろ姿が見たいのです」

京極映子が微笑をうかべて、窓に添って歩いた。九鬼とすれば、文句はなかった。かの女はあるところまで歩いて、ひき返してきた。しかし、製作者としてはなお不安を覚えるらしく、モデルの脇のところを撫でたり、顔を離して斜に眺めたりしている。ファッション・ショウとなれば、製作者は、画家が展覧会に出品すると同様に真剣である。ショウで評判が悪ければ、自分の生命がそれだけ削られることになる。

「これからもどしどしデザインして頂戴。私、九鬼先生の専属になってもようございますから」と、京極映子がいう。

「それは、光栄です。しかし、ぼくにとってはこれが初めてなので、さっぱり様子がわからないんですよ」

「いいえ、先生のお目は肥えていらっしゃるわ。経験者だから」

そう言うと、京極映子は稽古しているモデルたちのうしろを抜けて、他のモデルたちの休んでいる席へ離れていった。九鬼が見送っている。映子は、日本人ばなれがしている。日本の女性がはだかになった場合、いちばんの欠点は、背中の貧しさである。映子はイヴニング・ドレスで背中をさらしてているが、形がよくて、ゆたかである。

「ご紹介しますわ」

製作者の土方教子が、突然、九鬼に向ってそう言った。誰を紹介するのかと、九鬼はあたりを見たが、目新しい顔もない。

「こちら、京極和子さんで、映子さんの妹さんです の」

若い助手が、あたまを下げた。九鬼は無遠慮に京極和子を眺めた。信じられないのである。姉ほどの身長はなかったが、五尺二寸はあるだろう。姉の華やかな顔立ちにくらべると、妹は淋しい、白い花を連想させ

る。油絵と日本画ほどの相違があった。
「ほんとうですか」
失礼な質問である。九鬼は口に出したとたんに悔いた。
「ちっとも似ていらっしゃらないものだから……失礼いたしました」
京極和子は微笑をうかべたが、いっそう弱々しい印象である。横顔が美しいと、九鬼は眺める。歯並みが乱れている。が、かえってそれが素人素人していて感じがよかった。
「和子さんは、最近私のところにいらしたんですけど、ゆくゆくはお姉さんのように立派なファッション・モデルにおなりだろうと思いますわ」
「いいえ、先生、ちがいますわ、私……」
と、和子は土方教子のひとりのみ込みにあわててみせたが、謙遜だろうと九鬼は解釈を下した。
舞台稽古はつづいていた。
その時、俄かにピアノの調子が変った。稽古場になった大講堂では、一人のバレリーナーが、ところせましとばかりに踊りはじめた。黒紺に赤と白と横縞のシャツを着て、肉色のストッキングに腿のつけ根まで包み、細紐を一本腰にまいている、とんだり、跳ねたり、きりきり舞いをしたり、つま先で歩いたりして、即興的に踊っているらしかった。ショウの余興としての舞踊である。
「あのひとは、ファッション・モデルじゃなかったのですか。さきほど、サンマー・ドレスを着てたひとでしょう」
九鬼が土方教子をふりかえった。
「バレリーナーが本職の方ですわ。今度のショウでは、両方ともなさいます」
バレリーナーは、実に傍若無人に踊ってみせる。バレーに関しては素人の九鬼だったが、見ていても何故か安心が出来た。
——この安心は、何だろう。
と、疑問が生じた。
ファッション・モデルに雇われてきたかの女が、ようやく本職に戻ったという安心のせいだろうか。魚が水にもどったように、かの女は生き生きと踊っている。演出家もアナウンサーも、たれもかれも、踊りを

眺めている。見とれていると形容してもよかった。モデル達もお喋りをやめて、踊りを見守っている。あれほど華やかに、ロマンチックに新しいドレスを身にまとい、美しくひけらかして歩いてみせたモデル達は、とたんに火が消えたような存在となった。

ふと、九鬼の目がすべると、ひろい講堂の床に五月の陽が差しこんでいた。

京極映子は濃紺のイヴニング・ドレスで、つっ立ったまま、踊りを眺めている。かの女の存在までが、へんに薄れてしまったようである。あれほど自信をもち、幾千の目に迎えられてもびくともしないファッション・モデルの自信が、とり上げられたように無力なものに感じられた。

——これは、おかしい？　何故だろうか。

九鬼にとっては思いがけない発見であった。

ファッション・モデルといえば、女性の職業の中ではもっとも尖端的な、新しいものである。しかし、まだ、まだ海のものとも、山のものともわからないのだ。バレリーナーに対抗の出来るほどの何かが、まだ確立されていないせいか、本格的な職業となるには、何かが欠けているようである。未熟な職業のようである。しっかりした内容が感じられない。職業というにしても、あまり皮相的なもののようである。バレリーナーや歌手となるには、それになるためには生命を投げ出すという形容詞も決して誇張にはならない。何かそうした一生懸命なものが、ファッション・モデルには欠けているせいではないだろうか。もって生れた容姿だけで、やすやすと職業と名の付く座にすわりこんでいるようである。しかし、これからかの女らの中に何かが生れて来ないとも限らないのである。現在では、職業そのものがまだ生れたばかりでありファッション・モデル自身にしても、どこまで自分の職業に自覚があるのか、反省をすれば、心細くなるのではないだろうか。

バレリーナーは傍若無人に踊りまくると、汗をかいた。

ピアノのそばの椅子にかの女は腰を下したが、バレーの稽古着のまま休んでいると、ファッション・ショウのドレスを身にまとっている場合よりも自然に見えるのも不思議なくらいである。安定感があり、見事な

存在にみえる。

「あのモデルは、長身ですね」

八景の舞台稽古がはじまると、九鬼は若いモデルを指差して、製作者の土方教子に言った。

「あの方は、このあいだ高校を卒業したばかりだそうですわ。モデルになってから日も浅いと聞いてます」

「道理で、表情が固いですね」

五尺五寸以上はあるだろう。そのモデルはめぐまれた己の体躯を自負するあまり、つんとした顔をしている。歩き方も、上手とは思えなかった。白い肌であり、すぐに崩れそうな肉付である。

「しかし、あのモデルは肥る性質らしいですね。肥り出しては、モデルは失格ですからね」

八景目の舞台には、六人のモデルが並んでいる。一人一人に、演出家がスプーン・ステージを歩く順番をいいきかせている。胸に番号札をつけて、モデルは神妙にきいている。ピアノが鳴っている。アナウンサーが、拡声器をとおして、美文調の文句を朗読する。

その中のひとりは、普通のワンピースをきていたが、胸のところにイヴニングらしいドレスを吊るさげるように抱えていた。かの女は、モデルらしくなかった。演出者は、かの女にも歩くことを命じた。すると、ドレスを胸のところに吊しもっているかの女が、からだをゆすぶって、

「いやだわ」

と言った。演出者が困って笑った。

「あのひとは、受付の女のひとです。伊東絹子さんが都合で、今日の稽古に出られなかったものですから、代理に、ああしているのです」

と、土方教子がいう。

「素人ですね。それじゃ、スプーン・ステージが歩けないはずだ」

受付女がぞんざいな口調で、演出者の命令を拒絶したのを九鬼は面白いと思った。

「伊東絹子さんほどの、一流のモデルになりますと、舞台稽古を余儀なく休んでも、本舞台でとちるようなことはございません。ショウの前夜、本舞台で最後の稽古がございますから、その時に出れば、演出家のいうことは、すぐのみこんでしまいます。場慣れしていると申しますかしら」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton